

《大企研エッセイ自選集2》

「明法博士清原善澄、強盗に殺されしこと」

稲田和也（山梨大学）

今は昔、平安時代の中頃に、明法博士の清原善澄という、齢七十を超えた老官僚がいた。明法博士とは、今でいうところの東京大学法学部教授や最高裁判所調査官、あるいは内閣法制局長などを兼ねた、律令社会の法律のスペシャリストである。この清原善澄は明法博士の中でも有能な人であったらしい。

今昔物語の巻 29 第 20 話では、この老官僚の強盗殺人事件の顛末について語られている。何人かの法律学の学者に知人がいる筆者は、明法博士が巻き込まれた事件ということで興味を持ったのであるが、この話自体は「和魂（やまとだまし）」の使用例として意外と有名とのことである。ただ、ご存知のない方のために、さしあたり話の筋を追ってみたい（以下のテキストは、角川文庫版・佐藤謙三校注『今昔物語集〔本朝世俗部下巻〕』に従った。）。

今となっては昔の話である。明法博士の清原善澄は、明法道（律令に関する学問）については並びない能力を有しており、70才を過ぎても職務についていたものの、家は貧しく、日々の暮らしは不自由なものであった。

ある時、善澄が自宅にいる間に、その家に強盗達が押し入ってきた。善澄は上手く板敷きの下に隠れたので、彼らは善澄を見つけることができなかった。強盗達は家の中に入り、思うままに物を盗り、物を壊して、騒ぎながら出て行った。

強盗達が門を出た後、急ぎ板敷きの下からはい出した善澄は、門のところまで走って行き、門をたたきながら、大声で「おまえ達の顔をしっかり見たぞ。検非違使の長官に通報して、片っ端から逮捕させてやる！」と叫んだのである。

その声を聞いた強盗達は、善澄を殺してしまえといいながら、走って戻ってきた。

それを見た善澄は、慌てて家に戻り、板敷きの下に隠れようとしたのであるが、慌てていたため、額を縁に打ち付け、隠れることができなかった。

戻ってきた強盗達は、善澄を引きずり出し、太刀で善澄の頭を打って殺してしまった。そして強盗達は逃げてしまい、事件は迷宮入りとなったのである。

この一件に関し、今昔物語は、善澄は学問があったけれども、少しも「和魂」がなく、このような大人気ないことを言って殺されたしまったことよと世間の人々が馬鹿にしたと記している。

一方、今の世の中でも、「訴えてやる！」や「訴えてみろ！」、あるいは弁護士に向かって「弁護士会に懲戒請求してやる！」のような発言をしばしば耳にする。いつの世も善澄のような人は少なからずいるのであろう。

ただし、このような発言が常に良い解決を導くのかについては、疑問なしとしない。

今昔物語の言う「和魂」とは、実用的な知識や先天的な胆力・気働きを意味するとされており、他人に対し攻撃的な発言をする場合、これら「和魂」が必要なのは、今も昔も変わらないのではないか。

私自身も、生半可な法律や制度の知識を盾にして、今善澄となることは慎もうと思う。

2008年10月1日掲載